きょうそう時代の“人財”育成塾

第2回

他人じゃなく、自分に負けるな

有限会社ハヤカワプランニング 代表取締役 早川浩士

“トリセツ”に依存する人

「トリセツ」とは、「取扱説明書」を短く縮めた言葉である。

パソコンや携帯電話などには必ず、その機種の取り扱い方を説明する冊子がついてくる。それを読めば、「こうするのか、ああするのか」と、使い方が分かかようになる。

「相手をうまく扱うにはどうしたらよいだろう？」と悩む人の中には、人の「トリセツ」を切望するニーズが少なからずあったのであろう。

これに応えた「○型女の取扱説明書」という本が、昨年注目を集めた。

A型、B型、O型、AB型と4つの血液型による取り扱い説明を記した本を片手に、「A型って、こうなの！」、「B型って、そうなの！」、「O型って、ああなの！」「AB型って、そうだったの！」などなど、興味本位で読み比べながら、○型の人をうまく扱うには、「ああしてはダメ！」、「こうするのがヨイ！」ということが、取扱説明書風にまとめられてある。

ブレークした一因には、60問の「○型取扱マスター検定試験問題」が用意され、50問以上得点すれば「○型取扱マスター」との憎らしいほどの演出もある。

この「トリセツ」本に依存している人がいたとしたら、自分の血液型取扱説明書を読んで、自身の血液型取扱マスターとなって、自らの取り扱い方をうまくさせることが先決ではないだろうか。

「言うは易く、行うは難し」。多くの人は、「自分に優しく、他人に厳しく」と、自分のことを棚に上げて、相手の言動を気にしてばかりである。

“逆鱗（げきりん）に触れる”とは

「逆鱗に触れる」という故事がある。

龍のあごの下の逆さのウロコを逆鱗という。これを触れられた龍は、怒ってその人を殺したという一節が、中国古典『韓非子』にある。

天子（皇帝）を龍に例え、天子のような偉い人でさえ、許されること（やって

もよいこと）と、許されないこと（やってはよくないこと）がある。

許されないこと（やってはよくないこと）を行えば、怒りに触れてしまうのは当然のこと。人は誰しも、許されること（やってもよいこと）と、許されないこと（やってはよくないこと）がある。

「逆鱗に触れる」のは、後述のことであり、「虎の尾を踏む」もある。いずれも、上司、先輩など目上の人の怒りに触れたときに使うことがある。

人は、血液型に限らず、生まれ年の干支、生まれ月の星座も違えば、出身地、社会歴、生活歴、学歴、家族歴、そして生活環境も異なる。

対人関係を改善して良好に努めることは大事なことであるといって、その一つひとつを安易に“トリセツ”に求めてはいないだろうか。

△△サンとの対人関係が最悪なのは、「○型取扱説明書」の習熟度が低く、「○型取扱マスター検定試験」の得点も、あと数点及んでいないために「○型取扱マスター」となっていなかったから。このような言い訳が、堂々とまかり通るような現場であってはなるまい。

大事なことは、その人をうまく取り扱うことにあるのではない。

つもりちがい十カ条

その人に対して、どのように接したらよいかという「心がけ」は、いつの時代にあっても対人関係を揺るがせない、最も見すごせない視点である。

往々にして、「心がけているつもり」という人も少なくない。

まずは、「俗世間　つもりちがい十カ条」から目を通してほしい。

一、高いつもりで　低いのは　教養
二、低いつもりで　高いのが　気位
三、深いつもりで　浅いのは　知識
四、浅いつもりで　深いのが　欲
五、厚いつもりで　薄いのは　人情
六、薄いつもりで　厚いのが　面の皮
七、強いつもりで　弱いのは　根性
八、弱いつもりで　強いのが　我
九、多いつもりで　少ないのは　分別
十、少ないつもりで　多いのが　無駄

“心がけ”とは

「心がけ」とは、常に心に用意していること。“る”を１文字加えた「心がける」は、常に心にとどめる。常に注意して努力するなど、「心がけ」から一歩踏み込んで、いつも心にとどめておくようにするという意思を強めた表現となる。

遅刻をしないよう、心がける。挨拶を怠らないよう、心がける。ほう（報告）、れん（連絡）、そう（相談）を徹底するよう、心がける。

当たり前のように思われるかもしれないが、その当たり前の大切さを一人ひとりが大事にしつづけるには、「○○○を心がけ（る）」という言葉を意識して使うことを率先垂範（そっせんすいはん）することである。

上司（先輩）からの指導（助言）を忘れないように「心がける」とか、上司（先輩）を目指して努力するように「心がける」の“がけ”を漢字で表すと、心“掛”ける、心“懸”ける、となる。

“掛”、“懸”には、事物の一部を何かに固定してつながらせ、全体の重みをそこにゆだねるという意味がある。

この場合、その何かは心である。

いつも○○○を心にとどめて忘れないようにする。それが「心がけ」である。

演習　心がけの抽出

自ら、心がけていることを書いてみよう。周りの人たちに同じことを提案してみよう。そのうえで、互いの「心がけ」を確認してみよう。

“地獄と極楽の箸”の話

地獄にも極楽にも箸があって、その箸にまつわる喩え話がある(※)。

さて、地獄と極楽の箸は、どちらのほうが長いのだろう？

昔々、地獄と極楽をそれぞれ見学に出かけたという男の話である。

地獄を尋ねたのは、ちょうど食事が始まる時刻だった。罪人たちは、テーブルの両側に勢ぞろいして、食事をとろうとしている。

見て驚いたのは、食卓に並べられた料理の数々。豪勢な山海の珍味が山盛り状態だった。

それに反して、罪人たちは痩せこけた者ばかりで、目だけがギラギラと血走っていた。

箸を手にするや否や、ご馳走をつまみ損ねる者、つまんだものの口に運ぶ前に食べこぼす者などなど。

それもそのはず。

1メートル以上はあろうかと思われる、菜箸よりも長い箸を握らされていた。

中には、長い箸を器用に使いこなして口に運ぶ者もいたが、周囲の罪人がそれを妬んで箸で突く、叩くなどの邪魔をするため、誰一人として満足な食事をしている者はいない。

毎日、毎食、この光景が繰り広げられていたのであろう。

空腹を通り越して飢餓状態にあった罪人たちは、些細なことから喧嘩が絶えなかったという。

「極楽は、どのような食事の光景かな？」と、関心の湧いた男は出かけてみたという。

改めて、ビックリしてしまった。

それは、地獄となんら変らぬ料理が食卓に並べられ、しかも、同じように長い箸が用意されていたことだった。

しかし、極楽に旅立った人たちの誰もが穏やかで、ゆったりとして、満足そうな表情がにじみあふれていた。

地獄と極楽、料理も箸も条件は同じ。その違いは、どこにあるのだろう？

そんなことを不思議がっていた男だったが、食事が始まったとたん、その謎は吹っ飛んでしまった。

彼らは、お互いに向き合った者同士が、

「まず、何から食べますか？」

「私は、これを！」

「それから、あれも！」

と、それぞれが声をかけ合っていた。

そして、長い箸を使って相手の希望どおりのご馳走をはさむと、

(※) 参考文献　木村耕一編著『心の思いやり』幸せと不幸の分かれ道／1万年堂出版

「さあ、どうぞ！」と言いながら、その人の口に運んであげて、食べるための手伝いをしてあげたのである。

食べ終わるや、

「ありがとうございます。今度は、あなたの番です。どれにしますか？」

「では、これをお願いします！」

箸を運んだ者が答えて、食べさせていただいていた。

この食事の光景は、お互いの会話が弾んでいて、実に微笑ましいものであったという。

「なるほど！」

男は、極楽で見た人と地獄で見た人に「心がけ」の違いを感じた。

地獄の人は、「自分さえよければ、他人はどうでもよい！」という「心がけ」である。

つまり、自分中心でしかものを見ていないから、使いにくい長い箸を自分のために使おうとすることばかりが頭をよぎっていた。

極楽の人は、「自分のことはさておいて、他人のためにどうしたらよいか！」という「心がけ」である。

相手がいて自分がいる、という見方や考え方であることから、自分のためには使いにくい長い箸でも、相手のためには役に立つと精を出していた。

地獄と極楽の箸の長さは、どちらも引けをとらぬほど長かったのだが、相手を思いやる心を大切にして、相手のためを思って行動していた極楽の人は、また相手からも大切にされ、自分自身にも思いやる心が巡り巡ってくるという暮らし方をしていたという話である。

“因果応報”という言葉がある。

過去における善悪の業に応じて現在において幸不幸の果報を生じ、現在の業に応じて未来の果報を生ずることをいう。

この話を題材にしながら、思い当たることがあれば、話し合ってみるとよい。

“オイアクマ”

5の悪魔を「オイアクマ」という。

1.「オ」 → 怒るな
2.「イ」 → 威張るな
3.「ア」 → 焦るな
4.「ク」 → 腐るな
5.「マ」 → 負けるな

「オイアクマ」という5つの悪魔が住み付きやすい人がいる。

地位や肩書きがついた途端、部下に対して怒る、威張るようになる人。

相手の昇進の早さについていけず、焦る、腐る、そして負けを感じる人。

怒ったところで、威張ったところで、人は育たない。育たないと、焦ったところで、腐ったところで、何の前進もない。

最も大事なのは、他人にではなく、自らに対して「負けるな」である。

自らの中に巣食っている「オイアクマ」がいると感じたなら、己の心に克つという「克己心」を鍛え直すことから。

部下を見ているつもりの自身が、最も部下から見られているという「心がけ」を肝に銘じることも、人“財”育成には欠かせない。率先垂範（そっせんすいはん）とともに率先躬行（そっせんきゅうこう）（人に先立って自ら行うこと。模範を示す意図を強調する垂範とは異なるもの）の「心がけ」も励行したい。